

# 研究所だより

第294号  
2010年4月26日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3016

【ほめちから】—松本徳重 著

## 1, 「ほめる」とどんな良いことがあるのか。

①. 雰囲気明るく、問題の起きにくい学級になります。

事あるごとに教師が怒っていると、子どもはいつも「怒られる＝否定」されてばかりいると、疑心暗鬼になり自信を失っていきます。すると、教室の空気も殺伐と成り、笑顔が失われていきます。逆に「ほめる」ことは、子どもの行動を「肯定」することに繋がるので、子どもに自信を持たせ、教室の空気も改善され、子ども達の笑顔が増えていくことになります。

「ほめる」という行為の根底には、お互いの良いところを積極的に認め合うという要素があります。そのため、ほめることを続けると、子ども達にとって教室が居心地の良い場所になります。

授業の中でも、生活の中でも、居心地の良い、明るいさわやかな雰囲気があることが、子ども達にとっては最良の教育環境なのです。さらに、教師が率先して「ほめる」ことに取り組むと「ほめあう雰囲気」が子ども達に自然に伝わっていきます。

その教師が率先して、子ども達をあたたかく見つめていけば、子ども達同士もあたたかい関係を培っていくようになるのです。つまり、教師の日常の姿が子ども達に良い影響を与えるのです。そして、子ども達の個性を引き出し、公平に子どもを見つける姿から、子どもは多くのことを学び取るようになります。

さらには、「ほめる」材料や素材を見つけるためには、子どもの様子を観察することが必要になってきますので、子どもを見る視野が拡大していくのです。

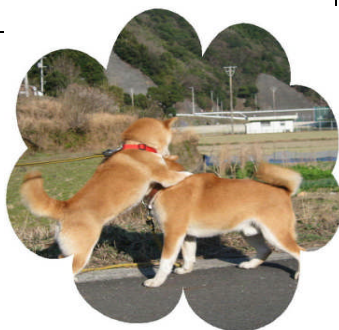
②. 子どもとの強い信頼関係を築くことができます。

どんな些細なことでもこまめにほめてあげることができれば、自然と、「先生は何でもよくみていて、ほめてくれる。」という信頼感が、教師と子どもの間でできてきます。そうした信頼関係が、学級の中でできてくればしめたもの。それをベースにして様々な教育活動を展開させていくことができます。

子どもが教師の言うことをよく聴いてくれるのはもちろん、子どもが自主的に、何かしら工夫したり、いつもと違う事に取り組んだりといった自主性を育てることに繋がります。さらに、子どもの個性的な部分をほめ、個性が長所だと気づかせることは、どの子にも居場所のある、問題の起こりにくい、安心できる教室をつくることができます。

## <新本購入、ご利用ください>

- ・子どもに好かれる先生・5つの法則
- ・公開授業、研究授業で行う道徳教材ベスト40
- ・中学生に道徳力をつける—授業で使える新資料35選
- ・いま、求められる文学の授業力
- ・いま、求められる説明文の授業力
- ・ほめちから—みんな違って、みんな良い!



## <「当たり前」をやめたらゆとりができる>

学校には「当たり前（学校の常識）」とされていることが数多くあります。時間を超越した会議、徹底して行う指導案検討、学校行事のために行われる数多くの準備や練習、校内研修での難しい言葉づくり、等々。こうしたことは、すべて子どもの教育のために行われてきたはずでした。ところが、教師は頑張りすぎ、無理をし、最も大切な子どもとの日常に疲れしてしまうという結果をもたらしてきました。

こうした当たり前と違って取り組んできたことを発想の転換で見直してみてもうでしょうか。教師一人ひとりの時間を取り戻してみたいかがでしょうか。

ゆとりある改善策の一つが会議のあり方です。例えば、

- 行事の計画は担当者が早めに企画立案し、文書提案する。不都合な点や改善した方がよい点は担当に申し入れます。話し合う必要が生じたら立ち話をしたり、当事者が集まって意見を交わします。（校務分掌担当者に責任を持たします。）
- 指導案検討の廃止をします。実践者自身の創意に任じます。廃止して生まれた時間は職員個々へ。そして日常的な情報交換をします。
- 行事については練習と本番という考え方をやめ、毎日が本番という取り組みを行います。行事のための練習を削減できます。
- 校内研修では、的を絞って討議をする。資料は事前に手渡ししておく。「他者を否定しない」「まとめはしない。自分の中に考えを創り出すことが基本」「時間厳守なので、できるだけ短くまとめて話す」「年齢・経験・職名にかかわらず、みんな平等」

これまでは、結論が出るまで、共通理解が図られるまで、勤務時間を超えて検討していました。しかし、そんな会議の終わった後は、充実感よりも疲労感が残ることが多かったのではないのでしょうか。

T小学校の実践報告の中にこのような文章が載っていました。この学校には毎日の職員朝会や終礼がありません。校長は「それが不都合なら復活させましょう」と言ってやめたそうですが、1年経っても復活していません。その校長が、「職員朝会をせずに、教室で子ども達と向き合うことを1日のスタートにしています。子ども達が学校に来たらその傍らに教師がいるのが当たり前でしょうか？学校の日課の中で、本当に子ども達のことを考えて、教師と子どもが向き合う時間を保障しようとするとき、じゃあ職員会議はどうなんだろう、当たり前のようになってきた職員の朝会はどうなんだろうという問い直しは当然必要でしょうか。職員会議をやらなくて大丈夫ですか？とよく質問を受けますが、うちは大丈夫ですよ、試しに廃止してみてくださいとお答えします。会議を否定しているのではなく、必要なら、必要な形でやるということなんです。奇抜なことでもなく、不思議なことでもなく、当たり前のことをやっているだけなんです。」そして、「時間がきたら打ち切ることにし、共通理解を図ることもやめました。すると、先生方には心に残る言葉や揺れ動いた感情が残るようになったのです。自分で感じ取ったことなので、強く自分の中に意識されるようになりました。」と話しています。更に、

教室で子ども達と向き合うことのできない校長は、毎朝、校舎の外に出て、子ども達を迎え、「おはよう」と挨拶する。必ずしも「校長先生、おはよう」という子ばかりではない。小さな声の子、唇は動くけれど言葉に出ない子、コクッと会釈だけの子、無言の子、無視する子、等々。「その日、その日の気分や体調がありますから、子ども達の反応は様々です。子どもなりの表現の仕方もあります。それを『みんな、元気な声で挨拶しましょう』というのは、おかしいと思いますね。」と子どもなりのやり方を認めています。

とにかく多忙な日々の中で、教師に子どもと向き合うゆとりのある時間を保障する。心のゆとりを持たせるために、身の回りの「当たり前」を問い直してみたいかがでしょうか。